

# 永代美知代「国木田独歩のおのぶさん」

有元伸子

## 【解題】

本資料は、岡田（永代）美知代の生前未発表原稿である。著者没後は原博己氏が保存し、上下町歴史文化資料館（現在は、府中市上下歴史文化資料館）に寄贈された。資料館での整理番号は、「OM-10」。

ほぼA4サイズの五種類の四百字詰め原稿用紙が使用されている（コクヨ、TS、SBが一種類ずつ、KSが二種類）。インク色はブルー・ブラック。いずれも原稿用紙の表面には他作品が書かれており、本作品は裏面を再利用して執筆されている。原稿用紙は二つ折にし、穴二つを紙紐でまとめた袋綴じである。原稿枚数は五〇枚。

翻字に当たっては、漢字を常用字体に改め、ルビの繰り返し記号のうち「く」と「ぐ」を使用しない他は本文のままとした。明らかに誤字にはママと振った。原稿には訂正箇所も多いが、いずれも最終本文を採った。なお、「」内の算用数字は原稿のページ数、□は本文が空白でルビのみ振られていることを示す。

## 【本文】

〔1〕 国木田独歩のおのぶさん

永代美知代

おのぶさん――

私はどう云ふものか、あなたの事が気になって堪りませんの。あなたが国木田独歩<sup>2</sup>の一番最初の奥さんで、恐らくはあなた自身だつて、

初恋の人だつたでせう新婚の独歩を捨てて、あんなにもおのぶさん、

おのぶさんと、まるで独歩と云へばおのぶさん、国木田と云へばおのぶさん、文壇内、誰知らぬ者もない程、独歩を狂人のやうに、嘆き悲しませた、そのお信さんだからでせうか。或はそれが何時ともなく、潜在意識となつて、又してはあなたの事を思ひ出し、時々考へないではゐられないのかも知れません。

つまり独歩の、あの有名な作『忘れ得ぬ人々』<sup>3</sup>のしきでもつて、私の頭脳に深くこびりつき、所謂『忘れ得ぬ人』となり切つた、〔2〕とでも云ふのでせうか。

いゝえ、それは違ひます。何故と云つて、私があなたを知つたのは、国木田さんよりも、ずっと以前で、独歩とあなたのいきさつ等、<sup>4</sup>てんで知りもしなかつた前でしたもの、『アラ、嫌だ。私は又、おのぶさんの事を』と、自分でも不思議な程、あなたの事を考へますのよ。

おのぶさん――

私が初めて、あなたを知つたのは、まだほんの、神戸女学院<sup>4</sup>に入つたばかりの、一年坊主の少女の時でした。

あなたもその頃は、本当にお若かつた。丁度お幾つの秋でいらつしたか、そんな事、私に解らう筈ありません。ですが、今から考へて、二十歳そこそこであつたのではないかしら。

旧女学院時代の事として、万事アメリカ式ミツション、スクールの新学期、九月の十日以〔3〕後でした。

国木田さんが、どんなお偉い作家だか、独歩の名前すら、その頃の私はまだ些少も知りませんでした。

ですけれど、あなたは本当にお美しかったです。その時分流行った、夜会巻きとか云ふ、あの後ろの襟脚を、うんと綺麗に見せて、思ひ切り、アツプにしたお髪の色が黒かったこと！あの髪形は、余程頭の格好の好い人でなくては、駄目だと定評のある結び方だけに、その点全く、あなたはお綺麗な方だつたに違ひありません。殊に皮膚の色が美しかったことと云つたら、今でもはつきり、私のこの眼の前に浮んで見えません。やゝ着みがよつた、クリームのやうな、お顔の艶やかさ。お眼元、口つき、お鼻の具合、それらを一つ一つ、今此処で委しく説明し得る程、こまやかな、達者な描写の筆を、生憎私は持ちませんけれど、あの神戸女学院の寄宿の寮の、中舎と西舎の間にかけられた、二階の橋の欄干にもたれたま「4」ま、殆んど毎日のやうに、夕暮れ時の一しきりを、如何にも物思はしげに、お侍ちなすつた、あなたのお姿は、何とも云へず、艶になやましげに見えました。

その時はまだ「忘れ得ぬ人々」など、此の世に発表されても居ず、自然私など読もしない、国木田さんのお作ですけれど、あの式なのでせう。どうにも忘れられず、今でもありありと、私の眼前をちらつきまします。

おのぶさん――

こんな事申上げたつて、あなたは屹度、思ひ出しもなさらなかつたでせう。

『これ、何て読みますの、ね、教へて頂戴』

いきなり、フランクリンの第一リーダアを開いて、おくめんもなくお訊きしては、その津度、あなたをお驚ろかせした、お下髪の少女など、あなたの御記憶から、とつくの昔に忘れ去られた事です。いゝえ最初から、私の事など、てんであなたの御記憶に、たゞの一「5」度だつて、留められた事すら、なかつたかも知れません。

でもあなたは、よく親切に教へて下さいましたのよ。例のあの二階の橋の欄干によりかかつて、少し俯向きかげんに、頻りと風にゆらぐユウカリの小枝に、ぐつと見入つていらつしやるやうな、さうした折だつて、あなたはやさしくそつと微笑みかけて、仰言いました。

『どら、何処？』

水色つばい、ちりめんネルの部屋着の上から、黄八丈のお羽織と云つた、あなたのすつきりとしたお姿を、思ひ出すたんび、私は何とも云へぬ懐かしさに、ぞくぞく、ならう事なら、今一度お目にかゝり度い、とさへ、そぞろに胸おどらせながら、せめてはまぶたの裏の面影をとばかり、ぐつと静かに、この眼をつぶります。

おのぶさん――

「6」まだ九月の中旬、それなのに、あなたは水色ネルの上から、黄八丈の薄綿ものを、何時もふんわりと、羽織つていらつした。女学院ではあなたが一人だけ、恐らく神戸の市中、何処を探しても、その時々季節に合せて、脱ぎ着の八釜しい習慣の土地柄だけに、さうした着つけの人は、あなた以外、たつたの一人、見つからなかつたかも知れません。事程左様に、あなたには水色つばいちりめんネルに、黄八丈のお羽織が、如何にもすつきりと、よく似合つた！

一種云ふにも云はれぬ、独特な美しさ。オリジナルな味ひがありました。

『矢張り東京つ児は違ふわねえ』

『東京つ児だからつて許ちやないわ、誰にだつて真似の出来ない、艶になやましきまでの魅力なるものが、自づと備はつてるのよ』

大学の人達、上級生達、寄るとさわると、皆な囁き合つて、あなたの噂さばかりして居りました。

「7」

おのぶさん――

あなたはあの頃、恋を捨て、曾ての恋人たり、現在の良人たる国木

田独歩に背いて、こつそり二人の私居を抜け出し、女学院を最善の隠れ家として、遙々、東京から神戸三界まで、逃げのびていらつしたんですつてねえ、呆れましたわ。

道理こそ、まだやつと一年坊主の少女の、この私にも、何かしらたゞならぬげの、事ありげな御様子に見受けられました。

何ですか御病気だとか、お体の具合が変だとか、あなたはよく、舎監先生につれられて、校医のところへお通ひなすつた。時々お廊下で摺れちがつたりする時のあなたは、愈々思おもわしげに、痛々しいと云はうか、可憐と云はうか、弱々しげな御様子は、むしろ、ろうたけて、又一層の興を備へたかとも、見受けられました。

「美しい人は得だわね、海棠の雨になやめる〔8〕風情つて、あんなのね」

月並みですけれど、別に文学志望でもないのものの、幾ら大学部の人達だつて、突嗟の場合、しかるべき、よりハイカラな、立派な形容詞が見つからず、彼様した昔からありきたりの、言葉をとりあげて、使ふより他、仕方ありませんまい。

——海棠の雨に悩める、まさに左様だわ——幼い私は、聞いてゐて、無条件に賛成し、感銘しちまひました。

でも世にも不思議な囁きが、たちまち、それからそれへと飛びました。

「あの人——あれですつて！」

「まあ、それ、本当のこと？」

「呆れちやつたわ！」

ですが校医から、診察の結果、それと聞かされた時の、舎監先生の驚ろきは、学院の狼狽は、まあ、どんなだつたでせう？

「舎監先生、血圧が百九十五、お可愛さうね、お年寄りだから、脳溢血ものよ」

〔9〕 私が、ちやんとはつきり、それと知つたのは、ずっと後の話です。私は何にも知らず、たゞものやさしげな、すいたらしい方だと

ばかり。だからこそ、折角いろいろと悩ましげに、思ひ乱れていらつしやるあなたに呼びかけて、又しても心ない真似ばかり致しました。おそまきながら、お詫びします。本当にかんにんして頂戴ね。

おのぶさん——

あなただつて、そんなこと、よもや、あり得ようなど、思つてもいらつしやらなかつたでせう。ほんの、ちよつぱりぼつち、御存じだつたらねえ、色々事情も違ひ、まさか、家出もなざるまいし、変つた様子に、何彼が運ばれて、もつと無理のない運命が、開けて居たかも知れません。

その御様子、それまではたゞ、佐々木信子と、御実家の姓を名乗つて、処女で通していらつしたあなたでした。校医の診察の結果〔10〕、事情止むを得ず、ちやんと正式に結婚した、人妻でいらつしやる事、而も訳あつて新婚を思ひ立ち、折柄北海道に旅行中のその良人に、たつた一言の断りもなく、家出して行辺をくらまし、本当の御両親揃つた実家にも内密で、そつと逃げかくれていらつしやる事など、委しく打ち明けてお話しなすつた。

と、女学院では早速御実家へ紹介し、遙々連絡をとつた事は、云ふまでもありません。佐々木家は東京でも有名なクリスチャンで、お父様は歴としたお役人ですし、あなたのお母様が、日本矯風会長<sup>10</sup>矢嶋榊子<sup>11</sup>と、御別婚<sup>12</sup>で、而も熱烈な矯風会員でいらつしたり、そんなこんなな事情も解りました。その上、あなたの御結婚のお仲人が、あの有名な徳富猪一郎<sup>13</sup>先生で、東京国民新聞の社長さんだつたりした関係から、一切万事、私達生徒には、何も知られないやうに、細いところまで、注意に注意を重ね、あれこれ気をくばり、女学院でもとても手厚く、あなたを保〔11〕護して居りました。

カツチ、カツチ、カツチ、カツチ！

夜中に拍子木が鳴らされ、音楽館、講堂、礼拝堂、理科学館、褒敬館<sup>14</sup>、教師館、食堂、受付けは申すまでもありません。私達寄宿の寮

舎など、あの広大な女学院の校庭の、隅から隅まで、何処も彼処も、貞さん、常さん、亀さん等々、ずいぶん派出所に呼び歩いた、園丁の賑やかな声!

【火の用心!】

【火の用心!】

【火の用心さつしやりませう!】

カツチ、カツチ、カツチ、カツチ!

これでは如何な事でも、腕白さかりの、寝ぼすけ揃ひの少女だつて、夜半の夢おどろかされずには居られませぬ。私は中舎と西舎を結んだ、例のあの二階の橋の、中舎の角の部屋に、あなたは西舎の二つ目のお部屋でした。屹度同じに眼をさまして、吐息をついたり、寝返り打つたり、暁方まで、寝そびれち「12」まつて、どんなにおびえて居ましたか。

おのぶさん——

ですが驚ろきました。訳も、理由も、すべて解らなかつただけそれだけに、私達寮生一同はすっかり面喰らつてしまつて、本当に周章てゝしまひました。そして矢鱈といろんな憶測を逞しうしました。

【妙な事したものね。嫌なら嫌で、出ようと思へば、ちやんと立派に、出られるぢやないの、馬鹿ぢやない!】

【本当だわよ。私達の女学院、牢獄ぢやないのよ。何でせう、夜よなかに、赤煉瓦の高塀を乗り越して、出奔するなんて、まるで強盗も同じぢやないの!】

【何て恥しらす!】

【美人だと思つて、私敬意を表して、馬鹿見ちやつた!】

上級生達の話の聞いて居て、幼い私は私なりに、いろいろ考へました。——だけどあの高「13」い赤煉瓦の塀が、どうして乗り越えられたのかしら?——

【お林檎の空箱を三つ重ねてね、お塀の内側に据ゑられてありました

とさ。足台にしたのよ、屹度!】

【よく引つくり返へらなかつたわね。空箱なんて脆いわよ。危ないぢやないの!】

【手伝ひ人があつたのよ。おのぶさんを先に逃がす間、ぐつと自分でおさへて居てさ、そのあと、自分で飛び越す位、男なら訳ないわよ!】

【あら、男?】

【きまつてるわよ。馬鹿ね!】

【成る程ねえ。考へたわね。男の人を手伝ひ人に使つたりしてさ。だけど誰でせう、その男の人?】

【解るもんですか。あの人、美人だもの、男の手伝ひ人の一人や二人、見つける位、ほんの朝飯前のお茶のこさいさいよ!】

【美人で、そんなものか知ら? でもあの人、「14」此の学期の始めに、東京から来たばかりぢやないの、まさかと思ふわ!】

【解らん坊主ね——あなた、姐己のお百の伝記、読んだことある? 高橋お伝の事如何?】

【よく知らないけれど、随分美人でせう!】

【左様よ、絶世の美人だつたと云ふけど、あの人と比べて、如何かと思ふわ。私達近代的新人の眼には、あの人の方が、より魅力的だわよ。兎に角、読んで御覧なさい。美人でどんなに怖いか、はつきり解るわよ!】

【あの人毒婦?】

【そんな事断言出来ないけれど、花だつて、美しい綺麗なものの程、毒花だつたり何かして、怖いでせう!】

おのぶさん——

あなたは何故、あんな夜よなか、赤煉瓦の高塀を乗り越えて、私達の女学院から逃げ出したるなすつたの? 如何して、あんな思ひ切つた、乱暴な真似をなすつたの?

【15】「佐々木さんと文通など、絶対になすつてはなりません。あの

方は怖ろしい毒婦です。確かに毒婦型の方ですよ」

私達はとき／＼、舎監先生から、斯様云ひ渡されました。

何故あなたが毒婦なのか、私には如何考へても解りませんけれど、比較的いろんなことを知る事の出来る、上級生達の間には、あなたが保証人の某氏と、恋愛してらつして、その為めに、あんな真似をしなければならなかつたのだと、専ら評判でした。

「アラ、そんなの違ふわよ。おのぶさんの逃げ出されの、良人と云ふのが、薄々おのぶさんが、此処にある事を感じたらしいので、今にめつかる、めつかつたら怖い、大変だつて、おのぶさんから泣きつかれて、保証人の人が、とう／＼同情して、出奔に協力してあげたよ」

「それでおのぶさんと、恋愛になつたのね」

「まさか、そんな馬鹿な事あるもんですか、〔16〕その保証人の人には、チャンとした奥さんもあるし、お児達もあることよ」

「おのぶさんに泣きつかれて、出奔に協力した、それが第一、間違つてますもの、美人の涙、これ程怖ろしいものないのよ。現に御覧なさい、その保証人の人、おのぶさんと一緒に、何処かへ行つちまつたつて云ふでせう」

「郷里の伊勢へ連れて行つて、あちらで赤ちやんが産れるまで、そつと身を隠させるためなのよ」

「なら好いけれど、怪しいものね」

「それはそれとして、あの何故御実家へ帰らないの？」

「良人の処から逃げ出したりして、余り我儘だから、勘当されてるんでせう」

「勘当だなんて、本当の親なら、自分の手許に引き取るわよ」

「お母さんが違ふんぢやない？ 屹度まゝ母なのね」

「可哀さうね」

〔17〕「いつそ、良人の処へ帰れば好いのに——」

「逃げ出した程、嫌な人なら、仕方がないぢやないの」

「だつて、赤ちやんが出来た以上、又問題も感情も、おのづと、別ぢやない？」

「左様よ、私なら帰つて行くわよ」

「それが本当ね」

「あの人まゝ母育ちだから、御自分の赤ちやんにだつて、母としての、本当の愛情なんか、感じないのか知れないわ」

おのぶさん——

私は夕方になるとよく、あの欄干によつて、あなたを思ひました。水色っぽいネルの着物に、黄八丈のお羽織のよく似合つた、華奢な姿のおのぶさんが、何故毒婦なのか、懐しいやうに、惜しいやうな気持ちに、折々はついとめどもなく、涙ぐむ事さへありました。

でも、その後何年か、私はあなたの事を、忘れるともなく、段々思ひ出さなくなつて居〔18〕りました。あなたに初めて出会つた秋が幾度かめぐつて、思ひ出深いネルの着物の季節となつた時、私はふと、あなたの其後の消息を聞きました。

「おのぶさんにも、困りものなのよ、あれからね、伊勢の一身田とかで、身二つになりましたの、産れたのは本当に、あの人によく似た、きれうよしの女の子だつたので、すぐ貰ひ手がありました。おまけにそれが、近郷切つての、豪農の老夫婦で、たつた一人の、かゝりごととして、大事に可愛らしく育てられました。ところが、おのぶさんが如何でせう。つい眼と鼻の桑名あたりで、如何はしい酌婦となつて、あらゆるない乱業ぶりなので、幾ら藁の上から、母子の縁を切つてしまつての貰ひ児とは云へ、現在の母親が、彼様したふしだら者と来ては、未始終が案じられる、いつそ今のうちに、何とか所里しなければなるまいと、律気な養父母だけに、いろいろ氣を揉んで居ますのよ」

〔19〕これはあなたも御存じの落実さん——矢島榎子刀自の令嬢、久部白夫人のお話でした由。落実さんは斯様も仰つたとか。

「でもね、その子のお父さんが、今文壇にその人ありと知られた、作家だと聞かされた養父母は、母親のおのぶさんは兎も角、大事な父親が真面目な文学者なのが、何よりの幸福だ。もしそのお父さんから、自分の種に相違ない旨を、承認して頂けたら、縁あつて一度養女とした以上、矢張一生親子として、頼りつ頼られつゝ生き度いと申されますのよ」と。

そこで私は又、様々考へさせられました。何と云ふ有り難い、温い養父母の心持なのでせう。私は見も知らぬ伊勢の田舎の、豪農の家庭を想像したり、あなたのお兄の、まだいたいけなそれに、何処ともなくつきまとふ、哀れに淋しげな様子を思ひやつたり、或時はまた、まだ一度だつて母様と呼んだ事のない、その母様のふしだらな噂さに、さらでだに、肩身のせまい貫はれつ兄の、数多い下男〔20〕下女から、意地悪い囀り振りを、あてつけがましく、見せつけられる、年頃の娘となつた日の、口惜しさなど、そんな事まで、それからそれへと空想して、どうにもそのお兄が、いぢらしくつて堪らないのです。何故私はそつと、あなたのお子の名前だけでも、聞いて置かうとはしなかつたか。

おのぶさん――

私はあなたのお子をモデルに、不思議な母子の、悲しい物語を書きました。御免なさいよね。私、決して悪気あつての事では御座いません。悪気どころか、又しては心なく、あなたの物思ひを乱しみだしてゐた、あの一年坊主の私は、いつか文学少女と呼ばれ、盛んに読書してゐましたが、段々読書ばかりでは収まらず、果ては当年の青年雑誌寄稿家とも、なり澄して居りました。自然まがりなりに、あなたの悩みが解るやうな気持ちをして、女学院のあの寮の、二階の欄干によりかゝ〔21〕つた、あなたの面影懐かしく、やむにやまれぬ思ひに、ついお生な筆を執りました。

あれは確か文庫<sup>17</sup>だつたか、新声<sup>18</sup>だつたか、ハキとは覚えてゐませ

んけれど、何やら秋草のペンネームを用ひたやうでした<sup>19</sup>。その翌年二月、私は田山門下の女弟子として上京しました。勿論花袋先生<sup>20</sup>と国木先生が、あつた親友の仲と知る由もなかつた私は、先生のお宅で、はからずもお眼にかつた独歩先生のお口づから、あなたの事を聞かうなど、思ひもかけませんでした。

「あのおのぶさんが、国木独歩のラバア、前夫人、そしてあの時の赤ちやんが！」

何たる不思議な縁なのでせう！

「オイ、俺にこんな長女があるんだとよ。見てくれ。俺にそつくりだせ」

例のあけすけの調子で、あなたの元の御良人、国木さんは一葉の写真を、私の先生にお見せになりました<sup>21</sup>。

パツチリと、惻撥げなお眼つきの、濃い髪〔22〕のおかつばさん。それこそは女学院時代に、あなたが妊娠してらつした、そのお兄よ。葦の上から親子の縁を切つて、あなたの手から、お離しになつたお兄ですから、幾らうろろう、養家の廻りを、だらしなない酌婦姿で、お歩きなすつたところで、正式にまともに、親子の名乗りをなすつた事はありますまい。幾らあなたがづうづうしくたつて、じつとそのお兄の顔を、御覧にはなり得ますまい。

御安心なさいまし。お写真は豪家の令嬢としてとられたもので、お身なりなど、申分のない、立派なものでした。

兎もあれ、私はハツとして、いきなりその場を立ちました。立つて私は自室に引きあげました。

だつて国木さんは斯様仰有いました。

「神戸女学院に逃げて居た時分の、おのぶさんの事を、誰か青年雑誌に寄稿したんだよ。それで俺の子だつて事が解つた訳さ」

私は机の上に打伏したまゝ、如何して好い〔23〕か解りませんでし

た。  
「如何したの？ 病氣かい？」

うちの先生が、そつと見に来て下さつた程、私の態度が、変に周章して居たらしい。

「だつて、あれ、私を書きましたの」

「どら、見せたまへ」

私は仕方なしに、問題の青年雑誌を取り出しました。

「成る程ね」先生は素早く読んで「好いさ、国木田君も、おのぶさんが、伊勢の田舎でお産をしたらしい話は、明治学院だか、女子学院だか、おのぶさんの昔の友人から聞かされて、酌婦になつて、素行の如何はしかつた事など、薄々しつてゐたさうだ。結局、娘の写真を送られて喜んでる位だ。君が悪がる事なんぞ、些少ともないさ」

おのぶさん——

私はあなたの気がしれません。あなたは何故、そんな酌婦なんて、賤しいつとめをしてお「24」暮しなすつたの？ いゝえ、何故さうなさらなければなりませんでしたの。あなたの其後の素行が、乱れ勝ちになつた事は、あなたの曾ての御良人、国木田先生も、薄々聞いて知つていらつしつたと云ふ。あなたはそれを恥かしいとお思ひになりませんか。恥かしくはありませんか。

あなたと結婚後の国木田さんが、如何あなたの、お気に召さなくなつたのか、門外漢の私には、とんと解りませんし、諺にも「人には添つて見る、馬には乗つて見る」でもつて、お互の意気と意気が、ぴつたり合はない事には、如何にもなりませんからね、私は何もあなたお一人を、一概に非難しようと思ふものではありません。

ですがねえ、国木田さんに、私がお目にかゝるたんび、たゞの一度だつて、あなたのお名前を、お口になさらない時はなかつた。

「如何？ 此財布、おのぶさんの見立てだよ」

お大事な、お大事な、命がけお大事な財布「25」布であらう、その財布を、上衣の内ポケットから取り出して、お見せになつた事もありません。

「ちよい小粋でせう。銀座の夜店で買ったのさ。これを持って北海道へ行つたんだがね。勿論一人でさ。だもの、あれからずつと斯様して、俺は大事に持つてゐる——あゝあ、これも形見になつちやつた！」

それから東京に帰つて見ると、二人で住つた、あの武蔵野の新居に、あなたの姿はなかつた。

「口惜しくつてね、見つけ次第、横つ腹にドスを突込んでやらうと思つたね。每晚枕元にも置いて居た。其処いら中、心当りを探し歩いて、到るところ持つても歩いた」

誰あらう、あなたの曾ての御良人——此の世にまたなき妻、いとしのものと思ひ込んだあなたに背かれ、留守中置き去りにされた、悲しき良人国木田さん、その人の口から、直接聞かされたこの私の感慨は、そも！

「26」女学院の寮の二階の、あの欄干によつて、毎日日中、夕方の一しきりを、判で刷つたやうに、ぐつと斯様、ユウカリの小枝のゆらぎに見入つて、やる瀬なく瞳を据えた、水いろネルに黄八丈のお羽織、あのあなたの面影がまざまざと、私のまぶたの裏に見えました。

現し世の人とも思はれぬまで、艶にろうたけたあなたの面影が、くつきりと一際冴へて、私の眼の前に、浮んで見えれば見える程、まあ、この人は！と、憎くて、憎くて、いつそ、国木田さんと一緒になつて、ドスでも突込みたくなりました。もうこれまで通りの懐しさなど、何処へ如何消えちまつたか、ほんの、ちよつぴりぼつちだつて感じませぬ。

だつて、私はもう、女学院の一年坊主、あのお下髪の少女と違ひます。文学修行の志望を持つて、上京、花袋門下の女弟子として、ツルゲネーフのエレナ<sup>22</sup>、モウパッサンの女の一生、等々、小説も読み、講義も聞いて、まだ自分自身、人を思ひ、人を恋した経験こそな「27」けれ、年頃の女ですもの、恋のしよわけ<sup>23</sup>の解らない道理はありません。いゝえ、一通りも二通りも、ちゃんと立派に解つてゐる見たいな、

気持ちで居りました。

ですもの、明日にも伊勢路に旅して、あなたのありかを探きとめ、諸肌膝詰で話し合ひ、場合によつたら、覚悟をして頂かなければならぬと、本当の事、この一本気な私は思ひつめて居りました。

【今更どうにもなりませんけれど、せめてはあなたのお子のために、いつそ此の懐剣でもつて、お果てなさい。どうぞ！】

私は泣いて斯様、あなたにお願ひするつもりで居ましたの。でも如何でせう！

【どうしてドスなんか、突込めるもんですか、俺は毎晩、ねもやらず、おのぶさんの帰つて来るのを待ち明した。昨夜も、今晚も、その翌くる夜も、ごろりと寢床の上に横にはな〔28〕つたが、如何して眠られるどころぢやない。まだ武蔵野の面影を其儘残した、道玄坂のあの丘の上の一軒家に、カラコロ、カラコロ、大根畑や茶畑の間の小径を伝つて来る、下駄の音を聞くと、どれでも皆な、おのぶさんの日和下駄の歯音に聞えて、じつと全身を耳にして聞き入つた。今度こそは、今度こそはと予期して、幾度がつかりしたか、一旦締めて、ちやんと戸締めまでした、裏の板戸も格子戸も、夜中にわざわざ立つて行つて、ガラリと開け放し、いつ何時、おのぶさんが帰つて来ても、訳なく入つて来られるやうな、しぐみにしかけて置いた。帰つて来たら、玄關の土間に入つて来たら、いきなり脚下にひれ伏して、泣いて詫びるつもりで、俺は待つて居た】

声涙ともにと云つた話し振り、私の眼からも、ポタリ、ポタリ、大粒の涙がとめどもなく落ちました。

【何だ、またやつてるな】

【29】 何かの用事で、ちよいと中坐してゐられた、うちの先生が、戻つて来て仰有る。

【だが、段々堂に入つて来た、中々うまいもんだよ】

【さうさ、うまくなくつて如何するつてんだ、俺はこれで五六年、いや足懸け今度で七年にもなるか、若い男女の顔さへ見れやア、おの

ぶさんの話で持ち切りなんだ。せめてもの胸すかしだ、うまくつて結構。ハツハツハ】

思ひがけない、うちの先生の茶々が入り、国木田さん独特の、闊達な、鉄火な調子で、折角しんみりした場面も、吹飛ばされる形になりました。

おのぶさん——

【国木田君は、中々話上手だよ。おのぶさんと蜜のやうな恋をして、同様僅かに一年たらずで、逃げ出されて別れてしまつた。而も未だにその記憶が、骨の髄までからんで居て、片時忘れる事が出来ない。それは事実だ。〔30〕だが、余りにも話し上手だもんで、聞いてゐて、何処までが真実だか解らないやうな、気持ちにさせられる事さへある。併しだよ、それだからこそ、あんなに純情で、すつきりして、何を書いて、すぐ人の心を引きつけないでは置かぬやうな、彼一流の秀れた文章が書けるんだ、彼れ程の純情、彼れ程美しく清い感情の持ち主、この世の中に、さうザラにあるものではない。思へばおのぶさんも、馬鹿だね】

これはうちの先生の、あなたに対する批評です。

【君に好いものを見せよう】  
うちの先生は仰有つて、一閑張りの手文庫から、一通の手紙を抜きとつて、私の手に渡されました。

誰の手紙だと思ひになりますこと？ 如何な気持ちでお読みになるか、知りませんが、国民新聞の原稿用紙に書かれたそれを、せめては此処に写して見ますよ。

【31】 日光行きはまことに行はるべきや、霧深く水多き彼地にありて、心静かにこの春を暮らし、君と共に我が燃ゆる心を、筆に上すを得ん事は、如何に幸なるべき。

たゞ我が家の桜見捨て、行くは惜しき心地す。梢を渡る風を聞きつゝ、冬の夜寒にも待ちしは、この庭の桜なりしものを。心急く君

も、わがこの心をば汲み給ふべし。庭の桃昨日今日の雨に綻びそめたり、されば桜咲き出でんも、遠からずとぞ思ふなる。四月十二日は九段の桜ちりて、わが妻のわれを捨て行きし日なり<sup>25</sup>。この日を都の空にて迎ふるは悲しけれど、われはこの悲しき日を待ちわびつゝあり、わが心は此の日を泣かんとて、待ちわびつゝあり。都の春を都にて送り、かくて又、日光の春を日光に迎ふるも樂しからずや、いかに。

三月廿七日 夜に入りて

哲夫

録弥様

〔32〕 あの男らしい国木田さん本人の面影、活達な性格そのもののやうな御筆跡、それをそのまゝ、どうお目に入れようもありませんけれど、それはあなた御自身、恋愛時代、御同棲時代、哲夫、おのぶ様へと、見なれ読みなれ、筆跡の一つ一つにまで、数限りもない思ひ出をお持ちの筈。それよりも読み解くうちに、脈々として、哀感を人の心にそゞり、誘はずには置かぬ、悲しい情緒、清らに純な、美しい感情の持ち主——私でさへも心打たれ、涙なしには居られないものを、あなたは如何御覧になりますか。斯くまでも愛されながら、云ひやうもない不偵極る裏切りの罪、まさに万死に当るあなたに對し、四月十二日は九段の桜ちりて、わが妻のわれを捨て行きし日なり、この日を都の空に迎へるは、悲しけれど、私はこの悲しい日を待ちわびて居た

何と云ふ悲しい、いぢらしい、やさしい良人でせう！ あなたは此の手紙が書かれた、あの武蔵野の丘の家の光景が、ありありと眼の

〔33〕 眼の前に、見えては来ませんか。

机の上に片肘ついて、今の今まで、ぐつと空気洋燈の灯に見入つて居たその人が、急にどつかと後ろの畳に背をつけて、仰向いて、長い、長い溜息を吐いて云ふ——

「万事終れり、わが望みはすべて、水のやうに溶けて、流れた！」

純情なだけに、打ちひしがれた哀愁の悲痛も甚い。ぼろぼろと涙を流して、心の底から、おいおい声を立て、泣く独歩の姿が、私にはちやんと、手にとるやうに見えますが、恋愛から同棲の記憶を持つた、あなたのお眼に見えない訳がない。さて如何お思ひになりますか。

おのぶさん——

あなたが夜よなか、あの赤煉瓦の高塀を乗り越へて、女学院をお逃げ出しになる時、塀の下に三つも積み重ねた、足台のお林檎の空箱を、ぐつと圧へて、あなたを先きに、それから最後に自分が飛び越え、わざわざ御自分〔34〕の郷里伊勢路に、あなたをお連れになつたと云ふ、専ら評判のあなたの保証人は、聞くところによると、留守宅の奥さんの許には、遂に永久、帰らずじまひになりましたつてね。

本当にその方と恋だつたのですか、あなたの第二の良人として、果して国木田さん以上価値あり、純情の持主たりと、信頼し得る人だつたでせうか。怖らく左様ではなかつた。あなたの素行の乱れが、烈しい失望を語つてゐます。明治の天才一葉女史<sup>26</sup>の日記の中に、馬場胡蝶<sup>27</sup>、島崎藤村<sup>28</sup>の名前を並べて、真に天のなせる資質を備へてあつたと云ふけれど、斯様した人達に、ゑてしてぶらさがり勝ちな、われこそはと云つた所謂美男子振った様子が、国木田独歩の何処にありますか、あの刻りの深い、一見眉目秀麗な天才的感じの容貌と云ひ、純情、率直、何処に一点わだかまりのない、あからさまな気風と云ひ、文学上の才能、□□<sup>29</sup>、全く理想的男性ではありませんか。自然派の驍將中、断然光つて居るのは勿論の事、〔35〕文壇の何処を探したつて、国木田さんに匹敵し得る程の人物が、たつたの一人見当つたら、お眼にかゝりません。

おのぶさん——

たしか大正の御代になつた頃でした。ある人の客間で見たアルバム

の中に、世にも素晴らしい美人の、洋装姿がありました。どうも見たやうな——じつと見入つて考へ込んで居ますと、同席の誰かが云ひました。

「アラ、おのぶさんよ、綺麗でせう。あの国木田独歩の前夫人だつた人！」

例の水色ネルに黄八丈のお羽織、それに代つて、眼前に見るあなたの御洋装！

「元々ハイカラなおのぶさんだもの、とても素晴らしいわ！」

あなたの其後のよるめきを<sup>30</sup>、散々聞き知つては居ても、酌婦にまでなりさがつて、現在わが子の貰はれて居る、その土地にまで、浮名を流して歩くあなたの事を、国木田さんはどんなに「36」か、心外千万だつたでせう。ともあれ、よかつた。おのぶさん程の人だもの、真面目になれば、どんな立派な道だつて開けて来る。私はホッとしましたよ。

その後また、あなたとお知り合ひだと云ふ、小野賢一郎<sup>31</sup>さんが「独歩の前夫人」<sup>32</sup>として、あなたの事を、その当時の新小説<sup>33</sup>にお書きになりました。それには独歩の日記<sup>34</sup>に記された恋の一件から、あなたの家出に至るまでのいきさつが、事実と著しく違つて居るとかで、だいぶあなたを弁護してあつたやうでした。独歩の日記にうそがあるのか、あなたの云ひ分が本当なのか、それは私達第三者の、決して決して、しり得る事ではないと存じます。それに新小説なる雑誌は、私自身にとつても、数限りもない嘘実の疑問を世間に残した、あの問題の小説「蒲団」<sup>35</sup>が掲載された雑誌ですもの。あなたと私と、同じ雑誌に！其処にも亦、運命の不思議さに驚ろかすにはあられない。何れが実か、何れが嘘か。誰にだつて、たやすく決する事は出来ません。ですけれど、国木田さんはうちの先生の親「37」友でいらつしやる上に、私の大好きな人で、あなたはあなたで、水色ネルの思ひ出の人として、あの神戸女学院の一年坊主以来、私自分が抑々、個性なるものを意識し始めたその時から、常に恒に、この心の奥深く秘めら

れた懐しの人です。

どちらが嘘でも、どちらが本当でも、どうだつて構ひませんけれど、実はそれが気になつて、どうにもなりません。

「私には信じられない。どうあつても信じられない。」  
「馬鹿なこと！」

おのぶさん——

あなたには悪いけれど、あなたの云ひ分なるものが、私にはどうも飲み込めません。それも仕方のない事で、元々あなたは私にとつて、単なる思ひ出の、おまけに、まぶたの裏に、奇しくも残る面影の人と云つたなか、幾年越し、思ひ出の永い癖にして、もの一時間、おちおち語り「38」合つた事ありませんもの。

それに引きかへ、国木田先生は、まだ見も知らぬ前から、あの立派な作品の数々に接して、盛んに感激した上、御目にかゝつて見れば、うちの先生の、またなき親友で、殊にはあけすけな、如何にも男らしいお話しつ振り。如何な事でも、あなたの仰有るやうな、そんな陰険な真似が出来るものではない。馬鹿馬鹿しいにも程があると、云ひ度くもなります。如何？

神戸女学院の上級生達の噂として居た通り、あなたの御結婚は勘当同様で、お仲人の徳富猪一郎先生がお偉いために、其お顔に免じ、御結婚がやつと成り立つた。併しお母さんがまゝ母だと云ふのは間違ひで、あなたはそのお母さんの長女です。たゞ御結婚の直前まで、特別立派な青年としてお母様お氣に入りの国木田さんが、強て娘のあなたを懇望された時、余りにも予期に反した意外さに、忽ち異常な反感が向けられた。自然よそめには、まゝし「39」い仲かと見られた程、あなた方御母子の間は、冷たく、不仲でしたつてね。

後に新宿でアンパンを売り出して「奥さんパン屋」で通つた、あの有名な中村黒光女士<sup>36</sup>が阿母さん格で、冷酷極るお母さんに代つて、あなた方お二人の新婚振りを見聞旁、御新居をよく訪問された。する

と定つて、あなたには嚴重な監視の眼がつきまどふ。良人の奇しい、  
口疑<sup>さいぎ</sup>、嫉妬の眼が光る。初めから終まで、ずつと傍に喰着いて居て、  
片時離れようとはしない。よんど止むを得ぬ、と云つた場合は、良人  
の実母が代つて監視に當る。

「たつたの一言、二人の間の不平を漏らしてみろ、たゞでは置かぬ！」  
その眼はすこむ。朝な夕な、たつた二人の新婚の家に、ともすれば  
ドスを突きつけて、烈しく怒鳴る。

「やい、逃げたら殺すぞ！ 逃げたが最後、世界の何処の果てまで  
も、追つて行く！」

これが如何して、あの国木田独歩の口から〔40〕出て来ます。□  
□<sup>38</sup>、率直そのものゝやうな、国木田独歩の何処に、斯くも陰にこも  
つた、邪険さが有り得ませうか。

「つまり独占的、優越感から来てるんだね」

「いや、そんな事はない、僕はむしろ、その反対で、一種異常な劣等  
感的、ノイローゼから来てると思ふ」

その何れによるものか、女の私には解りません、男性の心状が、ど  
んな具合なものか、とんと知る由もありません。国木田独歩程の男性  
が、何をそんなにひげ目に感じなければならなかつたか、

「オイ、怪しからんぢやないか君！ 俺は実に憤慨に堪へん！」

「何が如何したのよ」

「へん、何が如何したもないもんだ、先刻の君の、あの眼は何だ？

Y君を見た、あの君の眼は確かに秋波だ、此の妖婦奴！」

われ鍋にとち蓋の、われわれにだつて、新婚当時、斯様した所謂痴  
話めいた嫉妬はつき〔41〕ものでもす。

ともあれ、国木田さんがドスを持つて居た事だけは確かです。でも  
それは、最愛の妻に逃げ出された腹立ちまぎれに、その横つ腹に突込  
むためのドスでした。事ほど左様にあなたは美しかつた。

独占的優越感か、劣等感的ノイローゼか、そんな気持ちで、朝な夕  
な口迫された日には堪りません。恐いよりも、そんな人嫌になつて、

体が慄へます。ですから私、私の好きな国木田さんが、そんな人だつ  
たと信じたくない。思い度くありません。

「国木田さんの事、まさかと思ふけど、本當だつたら、一種の変態病  
者かも知れないわ、嫌んなつちやう」

私が斯様云ひますと、年上の友人某が、如何にも兄さん振つた、訳  
知り顔で話したものでした。

「変態病者でも何でもありません。一種の愛情表現なんだよ。自分はこ  
んにも愛して居る。〔42〕こんなにも甚く思つて居るんだ。この世  
の中に自分程猛烈な、熱情の持ち主はない——それを表現したかつ  
たんだ。要するにおのぶさんには、あまりにもそれが烈し過ぎて、  
受け入れられなかつたんだよ、ね」

過ぎたるは猶及ばざるが如し——私は染々、昔の人の云ひ古したこ  
の諺を、思はずにはゐられませんでした。

おのぶさん——

夢更ら此点、あなたの云ひ分を嘘だとばかりは、云ひ切りません。  
此の世の中には熱愛の結果、彼様した表現の仕方を持ち出す者も、た  
まにはあるらしい事も解りました。けれど私は信じたくないのです。

あれ程はつきりした頭脳を持つた国木田独歩ともあらう人のために、  
云ひやうもない口惜しさ、残念さをさへ感じます。

「あんな真似さへしなければ、おのぶさんから背かれもせず、幸福だ  
つたでせうに」

〔43〕 私はいつも思つて、度々云ひました。

「大違ひですよ。国木田君は、結局あれでよかつた。あのまゝおのぶ  
さんと一緒に居たら、それこそ悲惨極る末路に終つたでせう。おの  
ぶさんと云ふ女性は、相手の心を、ぐいと手許に引きつけて、ぷい  
と勝手に放つちやう性分なのです。国木田君との結婚だつて、つ  
まりはお母さんと張り合つた形で、ほんの一時の意地づくでしたよ」  
これは自然派の運動に携はつた、昔からの五人組の一人で、と云つ

ても、うちの先生でないことは勿論。私達末輩に対してさへ、嫌に馬鹿丁寧なお癖のその言葉の調子で、およそ誰だか、見当がおつきでせう<sup>39</sup>。

それは兎に角、あなたの御洋装を、よろめきの酌婦稼業から更生とばかり、思ひ込んで居ましたら、アメリカへ写真結婚の爲めと聞きました。而もその渡航中、あなたはまア、その船の事務長<sup>40</sup>と通じて——逸早く恋愛を完成し、あなたの上陸を一日千秋の思ひで待ちに待った〔44〕、哀れな移民<sup>41</sup>をすつぽかし、病気で上陸できぬ旨、事務長と結託、帰りの渡航費は勿論、莫大な療養費を巻き上げた上、素知らぬ顔で、新宿あたりに新居をお構えなすつた。例の小野賢一郎さんの話によると、御同棲の事務長は、郵船会社でもかなり有名な腕きで、あなた方の生活はとてつもない豊かさで幸福でしたとね。

あなたは如何してそんな無茶苦茶がお出来になりますの。基督教徒の家庭に育つて、女として相当教養あるあなたぢやありませんか、幾ら成功者だと云つても、所謂拳一つで異国に渡つた、一介の移民である以上、血の出るやうな貯蓄の金でなくてはなりませんまいが、ヤレ療養費だ、また転地療養費だと、いつまでもまたせて取り立て、それで贅沢三昧、気が咎めませんでしたか。それでいゝとお思ひですか、いえさ、折角酌婦の足を洗つて、ちゃんと結婚なさるならなさるで、写真結婚で渡航中、道ならぬ真似をして、移民をだましたり、血の出るやうな金を、きりもなく巻き上げたり、それで贅〔45〕沢して、何がよろしいと私はそれを云ふのです。

あなたとその事務長の間に出来たお子は、男だつたか、女だつたか、つい聞き漏しましたけれど、お可哀想に、これからやつと咲かうと云ふ、花なら蕾の青年時代、如何した訳か、発狂して、死んぢまひなすつたつてね。ちつと云ひ過ぎちまつて、悪いけれど、罰だと思ひになりませんか？ 親の罪が子に報ひた例はよくある事ですもの、頗る哀れに悲しくなつて、お泣きなすつたでせうねえ。

それからあなたが又、御結婚なすつた噂さも聞きました。

今度はとて立派な、上級の軍人さんで、閣下以上だとも聞きましたたが、あなたよりお年上の歴とした嫡子がありませんが、継母のあなたとの折合ひが悪くて、一向に寄りつきませず。あなたにお子さんが出来たらしい様子もないとの事でした。

【下の関の何処かで、おのぶさんを見かけた人がある】

〔46〕「軽井沢で、有島<sup>42</sup>と始終、並んで歩いてるつてさ、とても若くて、やつと三十そこそこ位にしか、見えないさうだ」

何処で誰が見かけても、あなたはいつても若くつて、びつくりする程美しかった。

「何とか秋子<sup>43</sup>と云つた、有島と死んぢやつた、婦人雑誌の記者があつたらう、あれは全然間違ひだ。何が情死なもんか、有島が死神に取りつかれた相手は、ちゃんと別にある」

「誰だい、それは？」

「国木田のおのぶさんだよ」

あなた故に変わって、まを飛ばされて、有島さんこそ、飛んでもない御迷惑！

北海道函館から南に当る室蘭地方の事を、俗に伊達と呼んで居る。旧奥州伊達領の人達が、所謂屯田兵となつて開根した土地なので、あなたの御実家佐々木家が、宮城県仙台の出身、其処に相当の土地を所有して居られた<sup>44</sup>。してまた、有島さんの父君は人も知る、北海道随一の地所持ちでした<sup>45</sup>。父君の死後、そ〔47〕の莫大な耕地を、以前の小作人達に分譲された等々、左様した関係から、有島さんとあなたは知り合つてゐた。

あなたが絶世の美人だつたが故に、独歩に背いて、暫くにもせよ、所謂よろめき時代の酌婦生活の祟りから、たまさか有島さんと会見して、一緒に歩いたそれだけで、変なスキヤンダルを生んだに過ぎませぬ。私はあなたに失恋して死んだのでない、有島さんを信じます。

おのぶさん——

其後私もアメリカに行つて居たり、何や彼やで、戦争中都に遠いこの備後路の山に、隠れ住んで居たために、香としてあなたのお噂さも打ちたへました。処が今年の三月廿九日、日本中、あの全国的大雪の日でした<sup>46</sup>。その大雪の寒い朝、上野から東北方面に向つて旅立つた、知り合ひの紳士がありました。

栃木県真岡<sup>47</sup>のそばに、高田専修寺あり、専〔48〕修寺にて、独歩の子をうみし信子が、此処に昭和年代を過ごしたるは、まさに奇とすべし、今日はその跡を尋ねて真岡を訪ふつもり、今その車中にあり。雪深く降りたるあした下野の真岡に向ひわれは急ぐも。

勿論その紳士なるものは、自然派文学の熱心なる研究者の一人です<sup>48</sup>。

私は雪深い備後の山に居て、これも亦より以上真白に大雪降りしきであらう、遥かに遠い下野の山を思ひ追憶のあなたをあれこれ偲んでひとり寂しく泣きました。然るに、あなたはもう五六年も前に御死去と知つた悲しさ！

「あなたのやうに、川魚は鮎だつて、鯉だつて、一切食べない。いけないね。おのぶさんはね、あの戦争の最中だつて、家の子郎党を方々探しにやつて、鰻を三匹づつ、屹度求めて来させ、鮑丁でもつて、自分で頭をぶつたぎり、尾の処へ刃をあて、ついとしごとく両方の身が骨から外れる。フ〔49〕ライ鍋に油を落し、その上に鰻の身をばつぱと乗せ、おのぶこの葉を刻んで一緒にフライする。三匹共皆な独りで喰つちまふ。とても勢力旺盛で、親父は勿論、一門の最年長者も何も、へいこらだ。女房も妾も妾も追ひ出して一家の全権を我手に握り、贅を尽して倒産したが、良人の生きてるうちから義弟と通じいま農業会社の社長をやつてる娘は其奴の間に出来た子だ、イヤハヤ盛んなもんだ、だがね、その娘も亦おのぶさん流で、いまだにお骨は土にもかへさず、其儘なのさ。ねえ。如何？」  
如何も斯様も、鰻の頭を自分でちよん切つて、三匹皆独りで平らげ

るおのぶさんと、生れついで蛇嫌ひから、蛇といふこの鰻なんか大嫌ひ、此の年齢になつても、いまだにかばやき一つたべた事のない病弱者の私なんぞ、てんで問題にもなりませんよ。

国木田独歩逝きて早くも八十年<sup>49</sup>、あなたも已におなくなりなさいました。私も最う七十路の高齢ですもの、何時何とき如何なるか解〔50〕りません。美貌のあなたが国木田独歩のおのぶさんとして、艶名を天下に謳はれなすつた。私は私で同じ自然派の作家、田山花袋のアンナ、ポール<sup>50</sup>でもつて、嘘美さまさまにからまる噂話に、彼れ是れ五十年——お互に噂さは世々に残るらんで困つた話の数々屹度泣いて笑つて、話しませうよねえ。

さて此の次ぎは何処でお目にかゝりませうやら、地獄の一丁目か、二丁目か、それとも極楽の銀座通りか、乃至はパラダイスのエデン公園のベンチでせうか。

思ひのまゝついで長手紙を書きましたが、此処に最近のニュースを一つ。それは国木田さんの遺児、あの時のあなたの赤ちゃん、現在何省何局長の令夫人となつて、浦子さんのお名にふさはしい立派なおやさしい奥様振りですつて。国木田さんが御覧になつたら如何？ 私はその嬉しいなお顔が見たい！ あなただつてお嬉しいいわねえ。さらばおのぶさん！

### 【注】

1 佐々城信子（一八七八—一九四九）国木田独歩の最初の妻（↓解説参照）。

2 （二八七一—一九〇八）詩人、小説家。「愛弟通信」「源叔父」「武蔵野」など。佐々城信子との恋愛、結婚、離婚の過程を「欺かざるの記」に記し、のちに「鎌倉夫人」を書いた。

3 「国民之友」明治三二年四月

4 タルカット、ダッドレー両女史によつて明治八年に創立された。昭和八年に現在の西宮市岡田山に移転したが、明治三一年当時は神

戸の山本通にあり、在籍学生生徒数は二〇二人。「教室、寄宿舎が  
かもしだす異国情緒は港都神戸の名物として親しまれた」という  
〔神戸女学院八十年史〕一九五五年〕。

5 明治三一（一八九八）年九月。美知代と信子の入学の記録が神戸  
女学院に残されていた（↓解説参照）。このとき、美知代は満一三  
歳、信子は満二〇歳。

6 「物思わしげに」の誤記か。

7 信子の姓は「佐々城」だが、この作品では一貫して「佐々木」と  
誤記されている。

8 信子の父・佐々城本支（一八四三—一九〇一）は元軍医で、この  
当時は日本橋釘店に病院を開業していた。

9 信子の母・佐々城豊寿（一八五三—一九〇二）は日本婦人矯風会  
の有力者であったが、信子と独歩の離婚により、一切の公的活動か  
ら引退した。

10 日本基督教婦人矯風会。一八八六（明治一九）年、東京婦人矯風  
会として発足したキリスト教女性団体で、禁酒、廃娼、一夫一婦の  
確立などの運動に取り組んだ。神戸女学院でも定期的に矯風会支部  
会合が開かれ、明治三十一年には臨時大会のため矢島楯子が来学して  
いる（同窓会報「めぐみ」一九、明治三十二年一月二五日）。

11 （一八三三—一九二五）廃娼運動家、教育者。女子学院院长や日  
本基督教婦人矯風会会頭を歴任。徳富蘇峰・蘆花は甥。

12 「御別懇」

13 徳富蘇峰（一八六三—一九五七）評論家。本名猪一郎。徳富蘆花  
の兄。民友社を起こして雑誌「国民之友」を発刊し、「国民新聞」  
を創刊した。

14 前年の明治三〇年に落成した尚装館（しょうけいかん）の誤記か。  
「周章て、しまひました」の誤記か。

15 久布白落美（くぶしろおちみ、一八八二—一九七二）。日本キリ  
スト教婦人矯風会総幹事、廃娼運動家。矢島楯子は、母ではなく、

大叔母にあたる。徳富蘇峰・蘆花は叔父。

17 文芸雑誌。明治二八年八月—四三年八月、少年園、のち内外出版  
協会発行。投書専門雑誌で、北原白秋や小島鳥水もここから出発し  
た。美知代も、明治三九年から四〇年にかけて二作品を掲載してい  
る。

18 文芸雑誌。〔第一期〕明治二九年七月—三六年八月、新声社発行  
〔第二期〕明治三六年九月—三七年六月、新声社発行。明治三八年  
二月（復刊）—四三年三月、隆文館発行。投書専門雑誌で、「新潮」  
の前身。美知代も、明治三九年から翌年にかけて九本の作品を掲載  
している。

19 美知代が花袋に入門して上京したのは、明治三七（一九〇四）年  
二月。したがって、作品を投稿したのは前年の明治三十六年のはずだ  
が、同年前後の雑誌「文庫」「新声」に「秋草」のペンネームの当  
該作品は確認できていない。

20 田山花袋（一八七一—一九三〇）小説家、詩人。「重右衛門の最  
後」「蒲団」「田舎教師」など。美知代は神戸女学院在学中の明治三  
六年、花袋に入門を懇願する書簡をたびたび出し、許されて上京し  
た。美知代と永代静雄との恋愛・結婚や、花袋の書いた「蒲団」の  
余波で二人の関係は輻輳したが、生涯美知代は花袋を師と呼び、一  
方で「恩は恩、恨みは恨み」とも語った。

21 相馬黒光「黙移」（女性時代社、一九三六年）や、国木田独歩の  
後妻・治子の聞き書き（川田浩「国木田治子未亡人聞書―独歩の思  
い出を中心に」）、「立教大学日本文学」九、一九六二年一月）によ  
れば、信子が自身の子を出産していたことを独歩が知ったのは、明  
治三五年の鎌倉丸の醜聞によるとされている（↓解説参照）。

22 ツルゲーネフの小説「その前夜」の女主人公・エレネ。花袋「蒲  
団」にも、芳子が時雄から「オン、ゼ、イブ」（「その前夜」の英訳  
題名）を学び、「エレネの感情に烈しく意志に強い性格と、其悲し  
い悲壮なる末路とは如何にかの女を動かしたか。芳子はエレネの恋

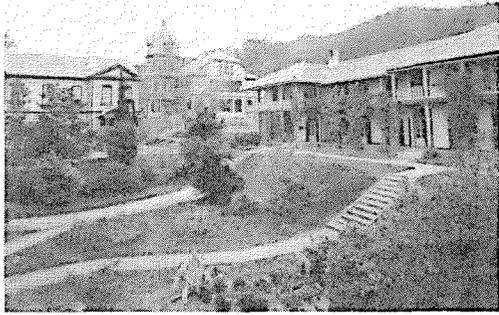


写真1 神戸市山本通の神戸女学院校舎  
右が教師館、左が講堂、中央奥に理科学館

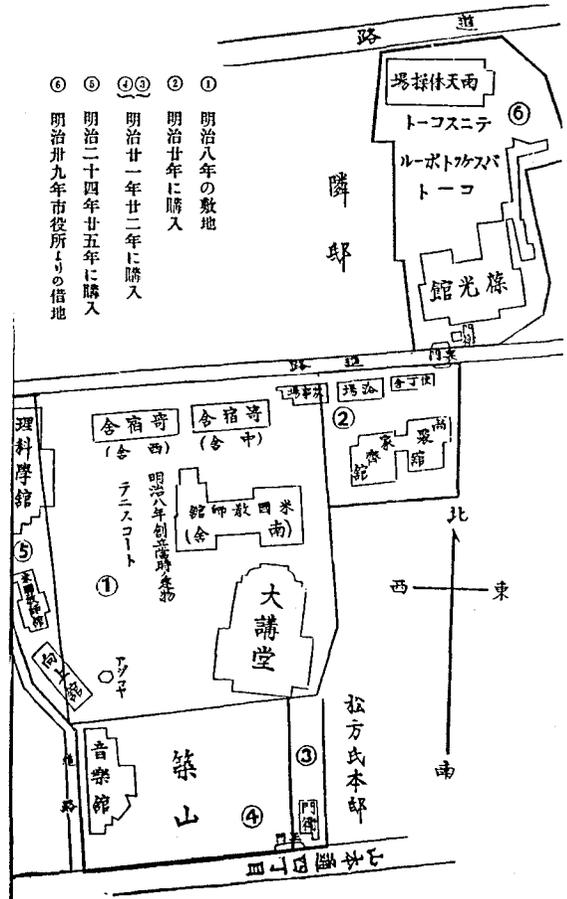


写真2 神戸女学院 山本通の寄宿舍  
画像右が寄宿舍2棟。手前が中舎、奥が西舎。  
画像左は教師館。



写真3 寄宿舍内の光景

(写真はすべて神戸女学院大学図書館蔵)



- ① 明治八年の敷地
- ② 明治廿年に購入
- ③④ 明治廿一年廿二年に購入
- ⑤ 明治廿四年廿五年に購入
- ⑥ 明治卅九年市役所よりの借地

図1 神戸女学院山本通校舎

美知代の在学中には、右上の敷地部分⑥と中央の大講堂はなく、①～⑤の付近に講堂があった。  
(『創立五十年神戸女学院史』大正14年による)

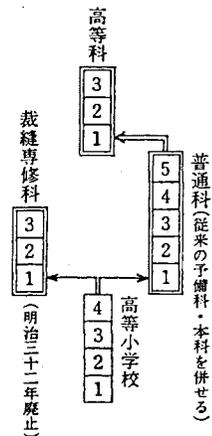


図2 学科組織略図

(明治29年改正)

美知代在学時の組織で、「高等科」を「大学部」と呼びならわしていた。  
(『神戸女学院百年史総説』昭和51年による)

物語を自分に引くらべて、其身を小説の中に置いた」と書かれています。

23 「諸訳」か。

24 独歩の「欺かざるの記」明治三〇年三月二十八日の条に、「昨夕、田山氏に一書を認め、今夕今井氏に託して投函」とある。独歩は、同年四月二一日、花袋とともに日光に行き、滞在中に初めての小説「源叔父」を執筆した。

この明治三〇年三月二十七日付書簡は、現在、田山家が所蔵しており、『定本国木田独歩全集』第五卷（学習研究社、一九七八年）のほか、花袋の「東京の三十年」にも全文が収録されている。「東京の三十年」には、この手紙が『国民新聞』の原稿用紙に書かれていると記されており、美知代の種本だと推定される。美知代は、この時期に美知代を頻繁に訪ねていた自然主義研究者・岩永氏が持参した花袋全集によって「東京の三十年」を読み、この小説に引用したのであろう（↓解説参照）。当該書簡は長文であり、本作品では冒頭のごく一部のみを引用し、しかも日光での滞在費用の心配などの件は省略されており、美知代の編集意識が窺われる。

25 「欺かざるの記」明治三〇年四月二二日の条に、「今月十二日は悲しき日の当日なり。其の日九段公園に至りぬ。昨年は桜花散りそめしに、今年は咲きそめ居たり」とある。

26 樋口一葉（一八七二—一八九六）小説家。「にこりえ」「たけくらべ」「十三夜」など。美知代は一葉への憧れを初期習作でもしばしば書き残している。

27 馬場孤蝶の誤記。（一八六九—一九四〇）英文学者、翻訳者、随筆家、詩人。トルストイ「戦争と平和」の翻訳や、『明治文壇回顧』など。

28 （一八七二—一九四三）詩人、小説家。詩集『若菜集』、小説『破戒』『家』『新生』『夜明け前』など。

29 「造詣」か。

30 昭和三二（一九五七）年、三島由紀夫の小説「美德のよるめき」により「よるめき」の語が大流行した。この作品は、同年以後、そう遠くない時期に執筆されたのではないか。

31 （一八八八—一九四三）朝鮮日報記者、東京日日新聞社会部長、日本放送協会文芸部長などを歴任。陶芸評論家、俳人。号は蕪子。「独歩を捨てた女」（『新小説』大正四年九月、目次は「国木田独歩を捨てた女」）

32 文芸雑誌。ここでは、『第二期』明治二九年七月—大正一五年一月、春陽堂発行。美知代も、一九年六卷（大正三年六月）に「蛙鳴く声」を掲載している。

33 国木田独歩の日記「欺かざるの記」（明治四一年一〇月に前篇、翌年一月に後篇）

34 田山花袋の小説「蒲団」（『新小説』明治四〇年九月）。自身と美知代、永代静雄をモデルに、中年の作家の若い女弟子への恋情と肉欲を真率に告白した自然主義小説の嚆矢として大評判をよんだ。

35 正しくは、相馬黒光（一八七六—一九五五）旧名・星良。夫・愛蔵と新宿中村屋を起業して、芸術家・運動家のパトロンとなるとともに、多くの随筆を書いた。佐々城信子とは従姉妹同士の間柄。この部分の記述は、黒光の『黙移』に依っている。

36 「猜疑」

37 「寛闊」か。

38 島崎藤村か。美知代は藤村にあまり好感をもっていなかったという（原博己『晩年の岡田美知代』木精社、一九九二年）。

39 鎌倉丸の事務長・武井勘三郎（一八六六—一九二六）。妻・とめが終生離婚を承知しなかったため、信子を入籍していないが、妻として扱い、大正八年、二人の間に娘・瑠璃が生まれた。

40 森広（一八七五—一九一五）。札幌農学校第二代校長・森源三の長男で、有島武郎の札幌農学校時代からの友人。移民ではなく、留学生として渡米した。

42 有島武郎（一八七八—一九二三）小説家。「カインの末裔」「生まれ出づる悩み」など。志賀直哉・武者小路実篤らと「白樺」を創刊。軽井沢の別荘で、波多野秋子と心中。佐々城信子をモデルに、「或る女」を執筆した（前編「或る女のグリンプス」は「白樺」明治四四年一月〜大正二年三月、後編は大正八年六月、叢文閣）。美知代は有島から貰った皮製のブックカバーを終生大切にしていたという（原博己「晩年の岡田美知代」）。

43 波多野秋子（一八九四—一九二三）「婦人公論」で原稿のとれる記者として著名だったが、有島武郎と軽井沢の別荘で心中死した。

44 佐々城家は明治二一年に北海道室蘭に一三町五反の土地を購入し、明治二六年には一家で本籍を移している。当時、キリスト教徒たちは北海道に「理想郷」を実現しようと開拓を志し、北海道に農園をもつことは流行の先端でもあった。

45 明治三二年、有島の父・武は、札幌農学校に進学した長男・武郎のために北海道の狩太（現ニセコ町）に広大な土地を購入して、開墾事業に取りかかった。父の死後、大正一一年、武郎は農場の土地を小作人たちに無償で解放して、大きな反響をよんだ。

46 美知代が七〇歳の昭和三〇年〜三九年で、同日に全国的に大雪が降ったのは昭和三三年のみ。「朝日新聞」昭和三三年三月二九日夕刊には、「春の雪」人や花を驚かすの見出しで、「九州の一部から裏日本一帯、関東にかけ春の雪景色となった」ことが写真入りで報道されている。

47 佐々城信子が晩年を過ごした。阿部光子『「或る女」の生涯』（新潮社、一九八二年）によれば、真岡の岡部完介と結婚した妹・義江の病気の看病のため、信子は、大正一四年に六歳の娘・瑠璃を連れて真岡に移り住んだという。

48 岩永胖（一九〇六—一九七〇）のこと。東京学芸大学教授。近代文学研究者で自然主義が専門。著書に「田山花袋研究」「自然主義文学における虚構の可能性」など。岩永は、昭和三〇年代に美知代

を何度も訪問して、聞き取りを行なった（↓解説参照）。

49 「五十年」の誤り。

50 「アンナ・マール」の誤記。花袋は美知代を、ハウプトマンの「寂しき人々」の登場人物になぞらえて、「私のアンナ、マール」と呼んだ（東京の三十年）。

### 【解説】

岡田（永代）美知代（一八八五—一九六八）は、広島県上下町出身の作家である。田山花袋「蒲団」のモデルとして知られているが、自身も小説や少女小説を多く書き残しており、今後の再評価と研究の進展が期待される。美知代については、拙稿「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（一）——研究の現状と課題」（『内海文化研究紀要』三九、二〇一一年三月）・「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（二）——著作の概要」（『広島大学大学院文学研究科論集』七一、二〇一一年二月）をご参照いただきたい。

本作品の旧蔵者である原博己氏は、広島県庄原市で晩年を過ごした美知代宅に英語を学びに通って、間近に美知代の生活を見てこられた。原氏の記憶によれば、本作品は昭和三〇年代に執筆された。美知代は原氏を聞き手として構想を語り、それをもとに執筆し、さらに原稿を朗読して手直した。こうしてできた清書稿が「婦人公論」に送られたが掲載はかなわず、編集長・三枝佐枝子氏の丁寧な断り状とともに返送されてきた。強い思い入れがあつて書かれた作品だけに、心なし落胆した様子が見受けられたとのことである。返送された清書稿は現在所在不明で、今回翻刻した本資料はその下書き稿である。他作品が書かれた原稿用紙の裏面が再利用され、本文が空白のままルビのみ振られた箇所や誤字が散見されるのは、そのためである。

三枝氏が「婦人公論」編集長を勤めていたのは昭和三三〜四三年のことであり、執筆時期を推定する手がかりとなろう。注46でも記したように、美知代が七〇歳代であった昭和三〇年代で、三月二九日に全

国的に大雪が降ったのは昭和三三年だけであり、三枝氏の編集長在職時期とも重なることから、本作品の執筆年だと見なしてよいのではないか。

では、なぜ昭和三三年にこのような作品が書かれたのだろうか。美知代は、大正一五年に永代静雄と離婚してアメリカに渡り、日米開戦前夜の昭和一六年に帰国し、晩年を庄原市で過ごした。現在までに判明しているかぎりでは、美知代が著書を刊行し、雑誌や新聞に作品を掲載するといった形で文学的活動を行なったのは、渡米前の大正一四年以前に限られる。帰国後には「蒲団」に関わる次の二つの手記を公表しているのみである。

・「手記 花袋の「蒲団」と私」(「婦人朝日」昭和三三年七月一日)  
・「手記 私は「蒲団」のモデルだった」(「みどり」昭和三三年一月一日)

両作とも、本作品と同じ昭和三三年に相次いで発表されている。他にもこの時期に書かれた作品はある。美知代には戦後書かれた生前未発表の原稿が数作残されており、そのうち宮内俊介氏によって翻刻公開された「云ひ得ぬ秘密」(「田山花袋記念館研究紀要」一〇、一九九八年三月。なお、同作品は原博己氏も翻刻している。↓「岡田美知代の素顔」『梶葉』六、一九九八年七月)は、美知代が花袋の「蒲団」に書かれた現実の出来事を回想し、作品と事実との相違を記した文章である。宮内氏は、原稿欄外の書き込みから、執筆を昭和三四年夏だと推測している。つまり美知代は、昭和三三年から三四年にかけて精力的に「蒲団」前後の出来事を手記化、作品化しているのである。

宮内氏は、この時期の一連の美知代の創作活動再開の引金になったのが、花袋研究者である岩永胖氏の存在だったと述べている(注48参照)。昭和三二年、岩永氏は美知代と手紙のやりとりを開始し、同年中には美知代を訪問、その後も頻繁に訪ねて花袋全集を紹介したりした後、翌三三年三月には美知代の花袋観が変化し、自らの名誉回復の文章を書くようになったというわけである。

このたび翻刻紹介した「国木田独歩のおのぶさん」も、岩永氏の訪問によって惹起された一連の過去回想による執筆活動再開の流れの中に位置付けることができよう。「蒲団」に関わる手記が昭和三三年後半から三四年にかけて相次いで書かれているので、本作品はそれらに先駆けて成された可能性もある。原博己氏は、美知代は参考資料として相馬黒光「黙移」の古本を入手して本作品を書いたが、その入手には、度々美知代を訪ねていた岩永氏の手を煩わせたようだったと記憶されている。また、作中の国木田独歩の田山花袋宛書簡も、美知代は岩永氏を介して筆写した可能性が高い(注24)。戦後、庄原市でひっそりと暮らしていた美知代にとって、花袋研究者の岩永氏との文通や訪問、氏が持参する書籍や資料に触れることは、五〇年前の若き日々の記憶の水脈を掘りあてていく契機となったのだろう。その重要な水脈の一つが、師である花袋と親しかった国木田独歩であり、独歩の妻であった佐々城信子だったのである。

次に、本作品の主要登場人物である国木田独歩と佐々城信子の関係を簡単にまとめておこう。

佐々城信子は、独歩の最初の妻であり、有島武郎の「或る女」のモデルと見なされた女性である。明治一一年、病院長・佐々城本文と矯風会書記で高名な社会運動家であった豊寿の長女として、東京で生れた。明治二八年六月、豊寿が日清戦争の従軍記者を招いて自宅で開いた晩餐会で、独歩と信子は初めて出会う。当時独歩は、徳富蘇峰の民友社から刊行されていた「国民之友」の編集者であり、日清戦争従軍記の「愛弟通信」によって世に知られ始めていた。二人は恋愛関係に入り、九月に独歩は信子との新生活の場として北海道を探索して帰京、一月には信子の両親の反対をふりきって結婚した。結婚時の条件にしたがって二人は東京を離れ、神奈川県逗子に住んだが、独歩の収入は乏しく、生活は厳しく、また独歩は信子を常に監視下に置いた。二人は明治二九年四月に上京したが、一二日に信子が失踪。狂乱状態になった独歩は信子が隠れていた浦島病院を訪ねるも、彼女の意

志は固く、離婚した。信子の母・豊寿は、娘の離婚により、一切の要職から身を引いた。

明治三〇年一月、信子は独歩の子を出産。浦子と名付けられた娘は信子の両親の子として届けられ、最初は千葉県の乳母のもとへ、次いで信子の従姉妹・相馬黒光の夫・愛蔵の知人に養女として出され、三重県津市で育った。明治三四年四月、信子の父・本支が突然永眠、その二カ月後には母・豊寿が後を追うように亡くなった。豊寿は最期まで信子の身を案じており、親族が相談して、信子を米国留学中の森広と結婚させるために、同年九月に渡米させた。アメリカに向かう鎌倉丸のなかで船の事務長・武井勘三郎に惹かれた信子は、シアトルに着いても、病気で上陸できないと婚約者に宣言して日本に戻った。もう一人の女性一等船客の鳩山春子が夫の勢力下にあつた『報知新聞』に通告し、明治三五年一月、新聞各紙は一斉にスキヤンダルとして報じ、信子が密かに生んだ子を里子に出したことまで書き立てた。これを読んだ独歩は信子の従姉妹・黒光を訪ねて、自分の子であることを確認している。その後、信子は武井と同居して、娘・瑠璃をもうけ、武井の死後は、末の妹の嫁ぎ先の栃木県真岡に移り、昭和二四年九月、生涯を終えた。

独歩が佐々城信子との関係について書いた日記「欺かざるの記」は、独歩の没後に友人・田山花袋らの手によって刊行された(注34)。出会いから恋愛期間をへて、両親の反対を押して結婚が成ったときには「午後七時信子嬢と結婚す。／わが恋愛は遂に勝ちたり。／われは遂に信子を得たり。」と喜びにひたり、反転して「一昨日信子の失踪以来、吾が苦悶痛心殆んど絶頂に達せり」と書きつける。恋愛への情熱と苦悶、歓喜と失意とが余すところなく描かれた日記は青春の書として読み継がれ、信子はかほどに熱情的に愛してくれた独歩を裏切った女として遇されることになる。

だが、一方でこの日記は、「独歩の理想はあまりに独りよがりであつた。新婚生活においても信子の生活が激変したにもかかわらず思いや

る心が欠けている」(本多浩「解説 恋愛小説を思わせる日記」「欺かざるの記抄 佐々城信子との恋愛」講談社文芸文庫、一九九九年)と評されても仕方のないものでもあつた。大正四年には、本資料でもあげられた小野賢一郎「独歩を捨てた女」(注32)が、昭和十一年には信子の従姉妹の相馬黒光「黙移」(注21・36)が出されて、一連の過程を信子の側から捉え直し、独歩の記述のバイアスが指摘される。さらに美知代没後にはなるが、昭和五七年には阿部光子『「或る女」の生涯」(注47)が出版され、信子の生涯をかなり詳細にたどることができるようになった。これらにより、結婚に至る過程にも、独歩の意に添って、二人を結びつけるべく信子と佐々城家の間を裂く画策をした人物(遠藤よき)が介在したことや、常に信子に監視の目がつきまといつた結婚後の生活の実態などが明らかになった。

さらに信子を描いたとされる文学作品に有島武郎の「或る女」がある(注42)。今日、信子の奔放なイメージを形成しているのはむしろこちらであろう。「生れながらの征服者であると同時に生れながらの敗北者」アンナ・カレーニナの像を念頭に、生れた時代が早すぎたと思いつつ、チャームやコケットリーを巧みに操って男たちを翻弄し、本能の力に突き動かされていく女主人公・早月葉子を造型した。前編はプロットはともかくストーリー的にはまだしも信子に添っているが、後編は妹への嫉妬とヒステリとで自滅し、子宮病で死に瀕する悲惨な人生として葉子を描き、全く現実の信子と重なるところはない。信子は黙殺したが、信子の末の妹・義江が憤慨して有島に抗議文を送り、会見の約束をとりつけたものの、その心中死によって果たせなかったことを、黒光や阿部は記している。

では、本資料「国木田独歩のおのぶさん」では、佐々城信子はどのように捉えられ、描かれているだろうか。

「おのぶさん——」の呼びかけが意味段落の始めごとに置かれ、一七回におよぶ呼びかけのリフレインが作品にリズムを形作っている。この作品は、「国木田独歩のおのぶさん」として、艶名を天下に謳はれ

なすつた」佐々城信子への、田山花袋の「アンナ、マアル」岡田（永代）美知代からの「長手紙」なのだ。五〇年の歳月の褪色を感じさせない回想をまじえながら、語り手の「私」は「おのぶさん」に呼びかけつつけていく。ただし、作品全体から読み取れる語り手の信子への情は親愛だけではない。むしろ表層では辛辣さの方が目につく、かなり複合的なものである。そして、回想された挿話には、従来知られていない信子や独歩に関する情報が真偽不明の「噂」のレベルも含めて大量に含まれ、同時代の文壇やキリスト者の社会のなかで信子がどのように見られていたのか、その空気が伝わってくる。

冒頭から、独歩と別れた佐々城信子が妊娠を隠して神戸女学院に入学し、保証人をまきぞえに学院から出奔して出産、娘を三重で養女に出し、自身は酌婦をしたという驚くべき挿話が語られていく。管見では、信子が神戸女学院に在学したことを記した先行研究や評論はない。そもそも信子が独歩と別れたのが明治二九年四月、娘・浦子を出産したのは翌三〇年一月。美知代が神戸女学院に入学したのは明治三一年九月であり、信子の妊娠期間と美知代の入学時期とは重ならない。とくに学院を出る件以降の信子の素行の記述には信憑性が薄い。では全くの虚構なのかというと、学院生活などの記述には一定のリアリティがあり、原博己氏も、美知代は独歩や信子の思ひ出話を何度も語っており、実際に会ったことがあるのは確かだろうと証言される。

そこで、神戸女学院大学の飯田祐子氏を通じて同大学史料室で調査していただいたところ、学院が編んだ「明治三十九年調 卒業生一覧表 附過去在学生名簿」に、確かに「佐々城信」の名があり、その二行前には「岡田ミチヨ」の名前があったとのこと報告をいただいた。それを受けて論者も同大学で名簿を確認した（神戸女学院同窓会誌「めぐみ」第三九号、発行年月日不明）。

「岡田ミチヨ」の記載事項は、入学「明治卅一年九月」、退学「同卅七年一月」、受洗「同卅二年五月」、現在住所「備後国上下町」。「佐々城信」について記載されているのは、入学が「同」（明治卅一年九月）、

退学が「同卅一年十二月」の二項目のみである。史料室では、信子の在学期間が短いこともあり、保証人の特定は難しいとのことであった。信子が、独歩と別れ娘を産んで養女に出して一年半余り後に、神戸に隠棲した理由も、短い期間で女学院生活を打ち切った理由も、いまのところ全く不明である。

ともかく、わずか三カ月のことではあるが、佐々城信子が神戸女学院に在学していたことが確認できた。学院関係者もご存知なかったことと、これは本作品によってもたらされた新情報である。「欺かざるの記」の信子にして「或る女」の早月葉子と目された佐々城信子と、「蒲団」の横山芳子たる岡田美知代。ともに後年、男性作家によって作品のモデルとされた二人の「新しい女」が、神戸女学院で同時期に在籍し、邂逅したのだった。当時、満年齢で美知代は一三歳、信子は二〇歳。相当の年齢差はあるものの、全校生徒わずか一〇〇人前後が原則として全寮制で過ごす時代であり、本作品で書かれたような下級生が「東京つ児」の上級生を憧れ仰ぎ見るような関係はあり得ただろう。

作品前半には、事実には即さないものの、東京から転校してきた垢抜けて美貌の上級生についての、女学生たちの無責任な噂話が、学院生活をおりませつつ活写されている。美知代は、現役作家時代の大三三年には雑誌「少女世界」に「現代少女の新用語」の連載をもっており、女学生たちの使う流行語や隠語を収集して解説を行っていた。初期にも女学生を描いた佳作は多い。本作品の読み所の一つは、美知代の筆になる、明治の世間知らずの女学生たちの英語まじりのおしやべりであり、夜回りの「カッチ、カッチ、カッチ、カッチ！」という音が聞えるかのような描写力である。

作品後半に描かれた、信子のアメリカ行きと帰国、その後の生活についても同様である。信子が再々婚をし義弟とも通じたとか、鰻を意地汚く食べるとか、死後も葬られることもないといった、根拠のない二次加害にもなりかねない「噂」が並べられる一方で、細部では信子

の実家が北海道の室蘭に広大な地所を有していることや、信子が晩年を真岡で農園を経営して過ごしたことなど、当時あまり知られていなかった事実と合致する箇所も多い。挿話は詳細で、美知代の周囲にいるキリスト者や文学者の会話や生活が写しとられる。

作品中盤で、明治三十七年に上京し花袋門下となった語り手「私」は、花袋宅で国木田独歩から信子との悲恋の顛末を聞かされ、感銘を受ける。作品外の事実として、このとき既に独歩は治子夫人と再婚して子をもうけ、隣家の娘にも男児を生ませている。離婚以来七年、既に過去のものとなった恋の顛末を若者相手に縷々として語って飽きない独歩を、「中々うまいもんだよ」と茶化す花袋の姿を書き込みながらも、また後年には、独歩の描いた理想的恋愛結婚の内実を相対化する小野賢一郎や相馬黒光の著作を読んでもいるが、それでもなお、「私」は信子ではなく、独歩の側に加担しつづける。

一つには、本作品にも表れているように、美知代が作家としての独歩への強い尊敬・憧れの念を抱き、人としての独歩に好感を抱きつづけていたからであろう。原博己氏によれば、美知代が最も好きだった文学者は若山牧水と独歩で、独歩の「武蔵野」を美知代は筆写していたという。「野心的、享乐的、そして感傷的」、「軽快、明朗」、「キリスト教に影響された禁欲的な開拓生活への憧れとロマンチズム」、「男性性を誇示する傾向」（関川夏央「日清・日露戦間期の作家」『明治の文学22 国木田独歩』筑摩書房、二〇〇一年）を併せ持っていたときれる独歩の人柄と作品は、師である花袋とはまた異なっており、そこに美知代は魅了されたのであろう。

いま一つ、規範を逸脱する女への制裁を女性自身が内面化してしまっているという女性嫌悪の根深さも全くないとは言えないだろう。「蒲団」のモデルだと見なされ世間の「噂」に苦しめられた美知代にして、他の女性をこのようにミソジニーに描くとは、と嘆息する向きもあるかもしれない。たとえば、信子の娘が狂死したという「噂」が書かれているが、事実として信子と武井の間に生れた娘・瑠璃は信子

の死をみとっており、狂死などしてはいない。「黙移」に描かれた相馬黒光の姉の挿話と混線したのであろうか。子どもを二人も亡くしたのは美知代自身の方であるが、にもかかわらず語り手は子どもの死を「罰」だとか「親の罪が子に報ひた例はよくある事ですもの、頗る哀れに悲しくなつて、お泣きなすつたでせうねえ」などと一見全く同情の感じられない評を付している。

それにしても、実際には種々の点で美知代と信子の生は重なり合う。——キリスト教信者として育ち、短い期間とはいえ同じ神戸女学院に在籍し、洗練された女学生時代を送って都会的な文化を豊かに身につけ、自由な新しい女としての意識を抱いたこと。幾度かの出奔。娘を里子に出す体験をし、離婚後に日米を往復したこと。再婚して夫と死別、晩年を地方にある妹の嫁ぎ先でひっそりと過ごしたこと。何よりも、男性作家の筆によって、自身の恋愛と結婚の様相を、とくに性的な規範から逸脱したスキヤングラスな存在として描かれたことによつて傷つき、その後の人生を大きく変えられてしまったこと。——

本作品執筆の三年前に、田中純によつて明治期文壇の六つの恋愛をまとめた『文壇恋愛史』（新潮社）が出版され、「蒲団」と美知代、独歩と信子も登場する。自らと近似した人生を歩んだ信子を、美知代は意識せざるをえなかつたであろう。しずかに余生を送っていた美知代のもとに花袋研究者が訪れ、過去を想起させる関連資料を与えられ、問われるままに語ることが繰り返される。このようにして思いがけず五〇年前の記憶の水脈を甦えらせる機会が与えられたときに、自らと近い存在として浮上したのが佐々城信子であった。冒頭で、「アラ、嫌だ。私は又、おのぶさんの事を」と、自分でも不思議な程、あなたの事を考へますのよ」と記されたように、過去を再生させつつある美知代のなかで、原点である神戸女学院で邂逅し、奇しくも近似した人生をたどった佐々城信子の像が大きく浮かび上がってくる。

だとすれば、先にあげた子ども死の挿話も、信子の人生があまりに自分と重なるため、自分と同様に信子も子ども死を体験したのだ

と錯覚・同化したためかもしれない。美知代は、長女・千鶴子を満一歳で太田玉茗に養女に出すが、千鶴子は翌年、脳膜炎のために亡くなる。美知代と夫の永代静雄は傷心を癒すために大分県別府で静養した。大正末年になって、美知代は静雄と離婚し長男・太刀男を連れて渡米するが、太刀男は結核にかかり単身帰国して静雄に引き取られ、五年後に二一歳で亡くなる。子どもの死を「親の罪が子に報ひた」「罰」だと感じ、「頗る哀れに悲しくなつて、お泣きなすつた」のは美知代なのであり、語り手はそうした感情を分身たる信子のうえに投影している。美知代にとつて信子は鏡なのである。ここに表出されているのは、一見ミソジニーだが、実はきわめて屈折した、しかしまごうことなきシスターフッドな関係であり、「嘘実さまさまにからまる噂話に、彼れ是れ五十年——お互に噂さは世々に残るらんで困つた話の数々屹度泣いて笑つて、話しませうよねえ」という、最終頁での信子への語りかけは真率なものであろう。

近しいだけに愛憎半ばする存在として関心を持ち集積し続けた信子に関する「噂」と、記憶のなかの像とを、「おのぶさん——」と呼びかけを繰り返しながら語りに語る。語り尽くしたところでハツと我にかえつて結末をつけた体の作品で、それだけに美知代の自らの鏡たる信子への執着の強さが窺われる。「婦人公論」への掲載がかなわず落胆した様子だったのも、それだけ自身にとつて重みのある作品を、大手雑誌初の女性編集長として話題になった三枝佐枝子氏に、女性の目で読んでもらい理解してもらふことを期待していたからであろう。いずれにせよ、この下書き稿からどのように手入れをして記憶を再構成させていったのか、所在不明の清書稿の発見が待たれるところである。「さらばおのぶさん！」という結句は、半生を「噂」で翻弄されつつ生き抜いてきた分身たる信子へのエールでもある。死した信子への決別のことばのあと、同年から翌年にかけて、美知代は花袋の「蒲団」と自らの関係を回想して原稿につづる作業を始めるのである。

付記 本研究は科研費(23520227)助成による成果の一部である。

本資料の公開をご許可くださった著作権継承者の方々、閲覧の便宜をおはかりいただいた府中市上下歴史文化資料館、資料閲覧と写真の公開をお許しいただいた神戸女学院大学図書館にお礼申し上げます。

また、本資料の判読と注解に際して、原博己氏、守本祐子氏、久保田啓一氏、佐々木勇氏、飯田祐子氏、神戸女学院大学史料室の佐伯裕加恵氏にご教示・ご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

補記 62ページ(注19)

『新声』第14編第6号(明治39年6月1日発行)に掲載された作品「長女」のことか。(執筆者名は、目次では「岡田美知代」、本文は「美知代」)。

「長女」は、某という男が、再婚した妻との間にはまだ子どもがなにもかかわらず、突然自分に十一歳になる娘がいることを知った顛末を語る構成となっている。某は日清戦争に従軍して文名をあげた「○新報の記者」で、凱旋後、周囲の反対を押し切って令嬢「佐伯艶子」と結婚するが、不如意な生活を送るうちに妻が出奔する。

作品「長女」はこの場面で中断しており、自分に長女がいることを某が知る経緯は書かれていない。作品冒頭に「(上)」、末尾には「(未完)」と記載されているが、この後の『新声』に続編は見当たらない。

「国木田独歩のおのぶさん」の記述とは作品発表年も異なり、ペンネームも使用されていないが、作品「長女」は明らかに独歩と信子をモデルとして作られている。

では、この発表年の違いは何を意味するのだろうか。現実の出来事は次のように継起した。

・明治35年11月 鎌倉丸の醜聞により、独歩は、信子が自分の娘を出産していたことを知り、写真を入手する。

・明治37年2月 美知代、花袋に入門して上京。花袋の友人であった独歩から信子や長女の話聞き、写真を見る。

・明治39年1月 美知代、永代静雄との恋愛が発覚し、父に連れられて上下町に帰る。「長女」を執筆。

・明治39年6月 『新声』に「長女」が掲載される。

ところが、「国木田独歩のおのぶさん」では、美知代は入門前の上下町にいた時期に信子の産んだ娘について小説を書き、それを読んだ独歩が娘の存在を初めて知り、写真を入手したことになっている。上京後に上下町に帰って書かれた作品が、上京前に上下町で執筆され独歩に影響を与えた作品として置換された。五〇年の歳月の経過による美知代の記憶の臆化か、あるいは小説としての叙述を整えるためか。いずれにせよ、独歩・信子・娘の秘められた物語に美知代が関与していたという劇的な形に、記憶／表象が加工されているのである。